

32) 東京歯科医学専門学校の学制・
教科書・教授陣等について（そ
の2）

Studies on the Curriculum, Textbooks,
Faculties etc. of the Tokyo Dental College,
College Standard (Part II)

東京歯科大学 ○長谷川正康
森山 徳長
石川 達也
高添 一郎
金竹 哲也

Masayasu Hasegawa, Norinaga Moriyama,
Tatsuya Ishikawa, Ichiro Takazoe and
Tetsuya Kanatake, Tokyo Dental College

高山歯科医学院10年、東京歯科医学院8年の短い歴史を経て、東京歯科医学専門学校は1907（明40）年9月12日認可されてから、1946（昭21）年に戦後の学制改革によって旧制大学に昇格するまで39年、その後経過措置として最終学年卒業生を1952（昭27）年春に送り出すまで45年の長い歴史を持っている。

本校はその発展の時期を以下の三期に分つことができる。

- 1) 1907～1920（明治40～大正9）年
- 2) 1921～1929（大正10～昭和4）年
- 3) 1930～1952（昭和5～昭和27）年

すなわち、第1期は昇格時3年制だった学制と教授陣、および校舎・設備を次第に充実させ、1913（大2）年4月より予科5ヶ月間を新しく設置し、さらに1919（大8）年4月より4年制とし、1920年9月には財団法人となって、経営基盤を整えた時代である。

昨年の本学会学術大会においては、主として第1の時期について報告した。今年は第2期および第3期について報告する。

（研究・教育内容拡充のための努力）大正11年1月校長血脇は、視察のため欧米諸国に出張。教授遠藤至六郎は同行しかつ留学（大11.1～12.9）

した。大正14年—15年、教授西村豊治はドイツ・スイスへ留学。大正15年7月教授奥村鶴吉は、日本政府代表として第7回万国歯科医学学会に出席、併せて歯科教育視察のため米国へ出張、12月帰国。昭和6年助教授斎藤久はライプツヒ大学留学7年 Dr. Med. Dent. の学位（遠藤、西村教授も同断）を受け帰国。

専任教授の研究の成果により、大正12年花沢教授は日本人歯科医師として初めて医学博士の学位を授与され、翌13年奥村教授、昭和3年西村教授、4年遠藤教授、5年中井助教授、7年正木助教授、9年矢崎教授、11年大井助教授、14年杉山・寺坂助教授、藤政講師が次々と学位を獲得した。

（校舎・施設の拡充）

1919（大8）年血脇は、大学昇格を前提とした学校改革案を示し募金を開始し、1920年には自己の全財産を寄附して財団とした。計画の第一として鉄筋3階建の建物を完成（1922（大11）年）して、主として付属病院として使用した。隣接地の買収・拡張計画を更に進める矢先に、関東大震災に遭い、鉄筋以外の全部の建物を焼失してしまった。しかし計画は練直されて1928（昭3）年1月起工して、地下1階地上4階のオランダ風瀟洒な鉄筋コンクリート建物を1929年10月完成、諸設備も整備・充実した教育の殿堂が完成した。なお1934（昭9）年市川市に土地を買収運動場設計案が完成する。1946年制年歯科大学昇格に伴い、予科および附属市川病院を開設する礎となった。

（学制）

1919（大8）年4学年制として、4月～3月の前・後期制をとり、1952（昭27）年まで踏襲。1946（昭21）年7月11日付、旧制大学令による東京歯科大学（予科3年本科4年）認可9月11日予科を開校する。専門学校は1948年迄入学、1952年卒業生を以って廃止。

（教授陣）

1920（大9）年の時点での専任教授は、血脇守之助、奥村鶴吉、花沢鼎、川上爲次郎、遠藤至六郎、宇垣錦三、西村豊治の7名、助教授は安井作太郎、武田譲、佐野実、矢崎正方、松井札七、照

内昇、齋藤久の7名、助手は小林泰朔、風間又四郎、真下(中井)武一郎、福島秀策、松本堅太郎、遠藤茂、酒井揆一、北村達郎、溝上喜久男、林辰三、岸田見齋の11名合計25名であった。兼任者は教授13、助教授1、講師2、嘱託1、助手1 計17名であった。

1940(昭15)年の時点では、教授は専任—8、兼任—20、助教授13—0、講師4—8、嘱託0—3、助手64—0、副手1—0であった(氏名略)。

1943(昭18)年血脇守之助は校長を辞任、奥村鶴吉が後任校長となる。

(教科書)

専任・兼任の教員による著書は枚挙にいとまがないが、歯科学叢書をシリーズとして出版し教科書の中心をなした。詳細は別途に報告する。歯科学報は学術と同窓会機関誌両面の性格を以て月刊され、戦争末期1944年まで続いた。戦後は1950年に復刊した。

(その他)

学生会、同窓会は専門学校発足以来継続して発展した。第3期は日本が軍国化の道を歩んだ時期であり、戦中の物資統制のため研究・教育に少なからざる支障が出た。戦争末期1945(昭20)年には第一・第二学年生の疎開が静岡、秋田両県へ行われた。歯科学報も廃刊となった。

しかし敗戦と共に、一転して歯科教育制度改革の波が押し寄せたが、奥村校長の総司令部、文部省当局者とのねばり強い交渉により、一早く歯科大学昇格を成し遂げることができた。戦後のきびしい世相の中、旧制より新制6年制大学に移行すると共に、専門学校は最終卒業生を1952(昭27)3年月送り出して、その使命を終った。以上の内容を図及び表を用いて報告した。

33) 木床義歯の起源

—縄文時代の木工技術—

新藤 恵久

気候が温暖湿潤で山地が7割を占める日本列島には、亜寒帯から亜熱帯までの樹木が豊富でしかも容易に手に入るところから、日本人は古代から

木と深いかかわりを持っていた。

昭和55年、石川県金沢のチカモリ遺跡から1 m近い直径のクリの木を縦半分割りにした柱の根が多数発見された。それから2年後に能登半島の真脇遺跡からも同じようなクリの柱根が発掘された。これらは切截面を外側に整然と円形に並べられていた。

この建物の謎を解いたのが鳥取県淀江町で出土した線刻土器である。ここに描かれた建物は高さ20 cm、それに12 cmの梯子がかかっている。そしてこうした遺構は5千年以上前から海岸に建てられた高さ23 mにも達する巨大な建物であったことがわかった。その後日本海沿岸の各地から同じような遺構が続々発見され、日本海巨木文化の存在がわかった。縄文時代の日本人は、用途による木の種類わけや高度の土木技術を持っていたことが明らかになった。

審美性や実用性、そして床の維持方法など今日の義歯に比して遜色の無いわが国独自の木床義歯は、こうした日本の国土の特性と日本人の木に対する高度の技術の伝統から創造されたものと考えられる。

34) 福島県舟曳町の入歯師の碑

日本歯科大学 新藤 恵久
高槻 正男
遠藤 吉雄

日本の近代歯科の歴史のなかで、福島県にはその開拓者が輩出している。小幡英之助の最初の開業場所は当県出身の隅川宗悦の診療所の一隅であり、小島原泰民、野口英世、緑川宗作、鈴木勝も福島出身である。また中原市五郎が歯科を志したきっかけとなったのも、また血脇守之助の最初の開業地も福島である。

この母胎として当地の入歯師の存在があり、その背景に当時庶民にとって高根の花であった木床義歯の需要に応えられた当地方の豊かな経済力、また木床義歯創造の起源となったと考えられる木彫仏の彫刻技術の伝統—会津若松の勝常寺の木彫